

全国厚板シヤリング工業組合

切板の需要動向

(H21. 12. 14)

1. 切断量の推移

(単位:千トン)

項目	20年度		21年度			
	3Q	4Q	1Q	2Q	3Q	4Q
	(実績)	(実績)	(実績)	(実績)	(事務局想定)	(事務局想定)
無規格	81	53	53	52	40	30
規格	542	434	382	354	330	310
合計	623	487	435	406	375	340

(出所)実績は全国厚板シヤリング工業組合「鋼板流通調査」結果による。

【コメント】

- 2Qの切断量(実績)は、前年比37.9%減の406千トン(当初の想定値は、390千トン)。
- 切断量(成品切板出荷+賃加工)の前年同期比の推移：
20年度1Q/+6.3%、2Q/+6.6%、3Q/▲3.3%、同4Q/▲24.8%、
21年度1Q/▲34.1%、2Q/▲37.9%)。
- 3Q(想定)は、前年比▲40%とみて、375千トン程度と想定。
- 4Q(想定)は、前年比▲30%とみて、340千トン程度と想定。

2. 業況

厚板シヤ業界の状況を概観すると、主要の建設及び建産機関連需要は、円高・デフレの進行、公共投資の予算・執行の抜本的見直し方針等により、前回報告時(9月)に比べ一段と冷え込んでいる。先行き回復の展望が全くないまま、壊滅的低迷が続いている。

これを映して、切板需給も縮小の一途をたどり、今年の春先以降は、積み上がった在庫の削減努力を懸命に続け一定の成果を挙げたものの、なお需要の落ち込みに追いつかず、マーケットの在庫過剰感は一向に払しょくされていない。

このため、全国各地のシヤからは、「年明け1~3月以降はもっと悪い」、「切板単価が下落し、赤字覚悟でやるしかない」、「仕事の取り合いに終始」、「今が2番底、来年は3番底到来か」、「最悪の事態が全国的に蔓延している」、「需要60%環境にじっと耐えるしかない」等、現状や先行きを危惧する、悲痛な声が上がっている。

参考までに、当組合が実施している月次調査により、シヤの活動水準を示す「切断量」の期別推移をみると、20年度3Q(▲3%)から前年同期比マイナスに転じ、以降、4Q/▲25%、21年度1Q/▲34%、2Q/▲38%と、期を追って減少幅が拡大

している。

一方、「受入量」は、20度4Q/▲20%、21年度1Q/▲42%、2Q/▲47%と急激に減少しており、今年に入りシャーはドラスチックな削減姿勢で臨んできている。

この結果、3～4月に55万トンまで積み上がった在庫は、10月末には39万トンと、約半年間で16万トンの削減となった。

しかし、在庫率をみると、仕入れ削減効果により7月頃までは逐月低下したが、それ以降は想定通りの進展が見られず、240%前後で高止まったまま推移している。適正レベル（150～200%）実現までは、いましばらく時間を要しそうである。

シャー各社は、需要激減の中、今後とも、在庫調整に向け、需要に見合った母材の申し込みを続行することとしている。また加えて、雇用問題、資金繰り問題、与信不安など深刻な経営不安に直面しており、この窮状を年末から年明け以降に向けどう乗り越えていくか、更に困難な状況が続く。

次に、需要動向を概観すると、

(1) 建産機部門は、昨年秋以降の急速な受注の落ち込みに比べると、機種によっては在庫調整の進展から最悪期を脱しつつあるが、生産量はピーク比30～70%程度にとどまっており、機種によってまだら模様を呈している。今後も混迷する状況が予想される中、需要家の工場再編、輸入部品への切り替え、製造拠点の海外シフトなど、シャーにとっての難題が山積している。

一方重電分野は、送電用、原発向けなどエネルギー関連機種が比較的堅調に推移しているが、世界的な電力需要の減少や資金不足で来年以降は減少するとみられる。なお、長期的には、米国を中心とする原発需要増により、2013年以降の繁忙が期待されている。

(2) 建設分野については、まず橋梁は、当初は、予算の上期前倒し発注に伴い、鋼材加工発注が年明け以降回復するものと期待されていたが、その後補正予算の凍結等により、想定した発注時期が大幅にズレ込み、今年度下期の加工量はかなり低レベルになると見込まれる。

また、来年度の工事入札量についても、今年度の25万トン程度/年から、20万トン/年ないしそれ以下の規模に激減するとの見方が多い。

一方、首都圏の超高層建築案件は、今のところ中止延期等大きな計画変更は生じていない。しかし、①足元の鋼材価格や鉄骨価格の急落により、ゼネコンによる見積りの見直しが再行われている模様で、加工予定が大幅にズレ込んでいる。ファブの仕事も12月以降急激に減少し、回復は早くて来春以降とみられる。また、②昨今の円高により、ゼネコンの海外ファブ起用の動きが活発化することが予想され、シャーの仕事量も今後かなり厳しくなる可能性が大きい。

全国各地域とも1～3月のシャー稼働は、更なる低操業を余儀なくされそうである。

(3) 一般店売り分野については、商業施設等の設備投資関連やマンションなど中小建築案件の中止・延期等の影響により、中小ファブの手持ち工事量は極端に少なく、シャーの稼働も50%以下の低操業を余儀なくされている。このため各地区とも荷動きが低調で、「その日暮らし」の状況が続いている。

一方、母材供給面をみると、メーカーロールの状況は、春頃から本格的減産体制に入り、その後の輸出増に支えられて一頃の緩和感がやや解消されつつあるが、内需減退に歯止めがかからない状況下、依然減産が継続されている。

また、一部メーカーの設備不調も伝えられるが、今のところ供給面への影響を懸念する声は少なく、納期も大幅に短縮化している。

シャー各社は、需要減退の長期化、市況の下落といった環境の中で、更なる在庫の削減を目指しているものの、マーケットの地合いが一向に引き締まらないため、ユーザーからの激しい値引き要求と、母材の仕入れ価格対応の狭間で苦闘している。

なお、シャー業界の当面する主要課題を列記すると、以下の通りである。

- ①在庫調整
- ②適正加工賃の確保
- ③雇用問題（助成金の申請、臨時休業、操業短縮等）
- ④資金繰り問題（信用保証制度の申請等）、与信管理
- ⑤コンプライアンス対応（品質証明、独禁法、輸送条件問題、等）。

※品質証明問題については、昨年来取り組んできたが、その成果として、「建築構造用鋼材の品質証明ガイドライン」がまとまり、本年中に発刊される予定。

- ⑥建築分野におけるコンクリート、及び海外鉄骨との競合問題

3. 足元の主要需要部門の動き

(1) 橋梁・建築鉄骨の動向

(全 体)

足元までの仕事量は、21年度上期の橋梁のずれ込みや、一部鉄骨ファブの好調に支えられて、ある程度稼働を維持できたものの、橋梁・鉄骨とも12月以降急減する見込みであり、しばらくは回復が難しいと思われる。

在庫量も今年5月をピークに30%近い削減を行ったものの、出荷量の減少により、在庫率のレベルからみると、まだ過剰な状況にある。

(橋 梁)

21年度の全国入札量は、当初30万トンレベルとみられたが、補正予算の執行遅れ等から、25万トンレベルに減少する見込み。また、当初予算の80%を上半期中に発注すると

の方針により、上半期は来年度案件も含め、かなり強引に入札が行われた模様で、結果、下半期の加工分が予想以上に少なく、入札量も減少することから、各ファブの下半期加工量は低レベルにとどまる見込み。

さらに来年度についても、道路予算の大幅縮減の政府方針から、入札量は大幅に減少する予定であり、大方の見方は20万トンもしくはそれ以下と、極めて低いレベルが予想されている。

関東の主要ファブの動向も同様に、下半期の加工量は各社とも不足しており、シャーの切断量は12月以降大幅に減少する見込み。また、注目の首都高/根岸線（5千トン×3橋）は、関東ファブの落札は1橋のみで、来年度入札量も4月以降、しばらく低レベルが続く見込み。

(鉄 骨)

関東の大手ファブは、予定されていた超高層ビル案件は、これまでのところ中止・延期等の動きは出ていないものの、足元の鋼材の値下がりや、鉄骨単価の急落から、ゼネコンによる再見積もりが行われている模様で、加工予定が大幅にずれ込んでいる。従って、これまで好調であった一部ファブの仕事量も、12月以降急激に減少しており、今後順調に推移しても次の加工のピークは早くも4月以降になる模様。加えて、昨今の円高により、海外ファブ起用の動きが活発化することが予想され、今後のシャーの仕事量はかなり厳しくなる可能性大。

大手ファブの仕事は、2～3月頃までであるが、稼働率は50～60%程度まで低下している。中小ファブについては極めて少量の仕事しかなく、与信不安が蔓延している。一部に規模縮小の動きも出始めている。

(2) 建産機・重電・金属工作機械の動向

(全 体)

全体感としては、

- ① 中国を主とするアジア新興国向け輸出の恩恵を受け、需要家の在庫調整が進み増産に転じたシャー
- ② 輸出不振や国内設備投資の見送りの影響で未だ復調が見込めないシャー
- ③ 前回の報告時（9月）よりさらに悪化している店売りシャー

と、ここ数カ月歪な状態が続いている。各社の生産量もピーク時比30～70%と、まだら模様となっている。

先行き不透明感が増すなか、需要家は、工場再編や部品購入の輸入品への切替えだけでなく、製作の海外シフト等々、我々シャーにとって難題続出が懸念される。

(建設機械)

建設機械の10月出荷額（日本建設機械工業会調）は、前年比▲50.4%で、13カ月

連続の落込み。一部機種を除き短期的回復の見込みはなく、低迷は来年以降も続きそう。

- ・油圧ショベルは、前年比▲54%と最悪期は脱出した模様。結果、工場及び販社在庫に調整の目途が付き、実販レベルでの生産に回復した優等生の部類と言える。
- ・建設用クレーンは、公共事業や建築不振の影響をまともに受け販売不振が長期化しそう。今年度は過去最低の2002年の販売台数を下回る見込み。
- ・鉱山機械としてのダンプは、東南ア向けで一部の機種に復調の気配があるものの、都市型ダンプは全くの低迷状態。資源の高騰・需要増の兆候はあるが、再び鉱山開発が活況を呈することを期待。

(板金・鍛圧機械)

板金・鍛圧機械は、企業の設備投資の長期停滞(10期連続のマイナス)により、製品在庫の顕著な減少は見られない。特に鍛圧(プレス)は、深刻な状況で、今年の2月から受注がゼロのシャーもある。

(重電)

重電は、総じて堅調を持続している部門である。しかしながら、急激な世界的電力需要減や資金不足の影響で、来年から仕事量は減少見込み。長期的には新興国の電力需要、米国を主とする世界的な原発需要等で、2013年以降は長期にわたる繁忙が期待される。

製鉄向けモーターは、2010年3～4月頃まで受注残はあるが、その後は案件急減。

(産機店売り)

産機店売り部門は、前回の報告時点よりさらに悪化。8月以降は乱売合戦が続き、採算割れの受注も常態化の様相。直需取引は価格面での交渉機会があるが、仲間取引は引合いそのものも激減、「その日暮らし」状態が続いている。

(参考) 成品切板の最終用途比率 (平成21年3月出荷分。厚板シャー工組調べ)

- ・建築用： 37%
- ・土木用(橋梁、鉄塔等)： 17%
- ・建産機用： 26%
- ・輸送機用(船舶、自動車)： 8%
- ・重電用： 2%
- ・その他(鉄道車両、容器、二次製品等)： 10%

以上

全国厚板シヤリング工業組合

シヤ一業の厚中板在庫推移

(H21. 12. 14)

組合員の厚中板在庫推移(167社・6事業所/自社所有分)

(単位:千トン)

項目	20/12末	21/3末	6月末	9月末	12月末	22/3末
	(実績)	(実績)	(実績)	(実績)	(事務局想定)	(事務局想定)
在庫量	497	551	500	406	340	300
前期比/量	51	54	▲51	▲94	▲56	▲40
前期比/%	111.4	110.9	90.7	81.2	83.7	88.2

【コメント】

■在庫量は、21年3月末(551千トン)をピークに漸減傾向をたどり、9月末406千トン(当初の想定値:380千トン)、10月末393千トンと、ピーク時に比べると28.7%、158千トン減少したものの、ここへきてやや調整の進展が鈍化している。

■在庫率も、需要の激減に在庫削減が追い付かず、4月末(295%)をピークに、5月末294%、6月末268%、7月末242%、8月末239%、9月末238%、10月末238%と緩慢な低下にとどまり、在庫過剰感が一向に解消されない状況が続いている。

■今後需要がどこまで落ち込むか予想できないが、引き続きメーカーへの申込み削減が続くとすると、12月末在庫は340千トン程度に、22年3月末は更に圧縮され300千トン近くまで減少するものと想定される。

仮に、今後、月間平均出荷量が15~16万トン程度(前年比▲30%~40%ペース)で推移した場合、12月末在庫率は213~227%、22年3月末は188~200%程度と推計される。

これからも需要水準は前年を大幅に下回って推移すると思われるので、需給均衡に向け、シヤ一在庫の一段の調整努力が必要である。

以上